

# 第76回 小中高校生の吃音のつどい (Summer Camp)

8月4日(土)、5日(日)小学生9人、中学生5人、高校生6人、ご両親5人、スタッフ18人の計43名が参加。山梨県南都留郡民宿「松葉荘」にて開催。自然豊かな溪谷で、皆様充実した2日間を過ごせたのではないのでしょうか。私にとつてサマーキャンプは、初参加でした。遠方からの参加者もいっしょに、参加して良かったと思える会にしたいと思い当日を迎えました。私が担当した**高校生グループ**の話し合いでは、**カミングアウト**について話す機会がありました。友人などに話せる人、絶対に言いたくない人、十人十色の意見がありました。中でも、勇気を持ってカミングアウトすることで、信頼できる人に出会えたと聞いて羨ましく思うと同時に、後悔の念で一杯になりました。まるで、社会人になる直前まで吃音から逃げてきた自分の背中を押されている気がしました。そして、子供達が吃音について真剣に考え、成長していく姿を見て自分も負けてられないと何度も思いました。参加者の皆様方も、吃音について深く考え、色々な人の意見を聞き、友達と話し合い、とても貴重な経験となったと思います。サマキャンで学んだことを、普段の生活で生かして貰えると幸いです。

(リーダー **山岸大起**、**忍田喬也**(江東区立南陽小こたばの教室卒)、**樺沢哲**)

## K.Sさん(小3女子)

娘が答えた「**吃音が良いもの**」について、(サマーキャンプの後、)本人と話しました。

娘は、自分が吃音なので、他の人や外国の人がどもってしゃべっていても、変だと思わない。**相手をバカにしたり、傷つけることをせずに済むから、吃音は良いもの**と言います。

正確には、自分が吃音であることは良いことと言っていると思います。

娘は、例えば、耳が聞こえない人や、目が見えない人や、手が無い人がいてもそういう人達がいることを知っていれば、偏見を持たずに普通に一緒にいることができるはず。だから私がどもっていて良かったと、話します。

娘は今まで吃音で困ったことは無いと言い切ります。でも、そのことでいじめられるのは恐ろしいと感じています。自分が傷つきたくないから、相手も同じように傷つきたくないと思うのでしょうか。相手の立場になった考え方やされたらイヤなことにとても敏感ですねと、以前の担任の先生に言われたことがあります。

今年の夏休み前に、クラスメイトに自身の話をしました。とても恥ずかしかったそうです。みんなに見られていることや、自分で考えた文章が、ちゃんと伝わるか心配なのでドキドキしたからだそうです。

本人は、どもりながら普通に話せているから、吃音であることを意識しないそうです。彼女にとって、どもっていることが当たり前なのです。中学1年の姉も、そういう話し方をする妹だから、特に意識はしてなかったと話します。

もちろん些細なからかいはありました。真似をされたり、イヤなこと言われたり。そういう時は自分でやめて!!と言うそうです。言ってもダメな時は我慢します。そして自宅に私に話します。そうすれば、スッキリできると言いました。

彼女の吃音とちゃんと向き合って3年です。みんなと同じしゃべり方になりたいと言っていた5才の女の子にその願いは叶わないと知らせることを私は怖れました。

言語聴覚士の方から、吃音であると告げられた時、病気じゃない、変じゃないと分かって安心したと言ってくれました。

私はそれから吃音である娘を強く肯定することに励みました。どもって話すことは、悪いことではない。もちろん、恥ずかしいことでもない。どもっている人は沢山いて、ほとんどの人が普通に暮らしている。吃音でも豊かな人生が送れる。などと話し、吃音であることは決してマイナスではないと伝えていました。娘が自分で感じて考える前に、私が刷り込んだような気がして、これでいいのか、これからどうなるのか、どうすればいいか、不安でした。

そんな中、昨年の‘演劇のつどい’に参加しました。たくさんの仲間がいることが分かり心から安心しました。堂々と吃りながら話すスタッフの姿は本当に素敵でした。あんな風に育っていったらと思いました。娘も同じように感じて、将来はスタッフになって吃音で困っている小学生の助けになりたいと言いました。

娘は、この出会いによって吃音で良かったと自分自身で感じたように思います。吃音であったからこそ、分かったこと・体験できたこと・感じられること、があります。それが彼女の視野を広げ、思いやりの心を育てていると感じます。

9/8 のことばの教室でも、吃音があつて良いと担当の先生に答えていました。どもる自分こそが、私らしいと思うからこそこの答えでしょうか。今後も娘の心を見守りながら幸せになれる力を育てていけたらと思います。

**関口 聡美(小学生グループスタッフ)**

**(国立障害者リハビリテーションセンター学院 言語聴覚学科 2年)**

それぞれの気持ちにもっと向き合えたら良かったと感じました。小学3年生のK.Sさんが、**吃音は良いものだと思う**と答えていて、その理由を聞いてみると「吃音でない人とお仕事して世界が広がる」と話していました。Kさんの夢はウェイトレス(レストランを開くこと)だそうです。Kさんがどんな思いで言ったのか聞けませんでした。殻に閉じこもらず、様々な人と出会って繋がって自分を知ってもらい、自分の知らない世界を知る。人と人が関わる

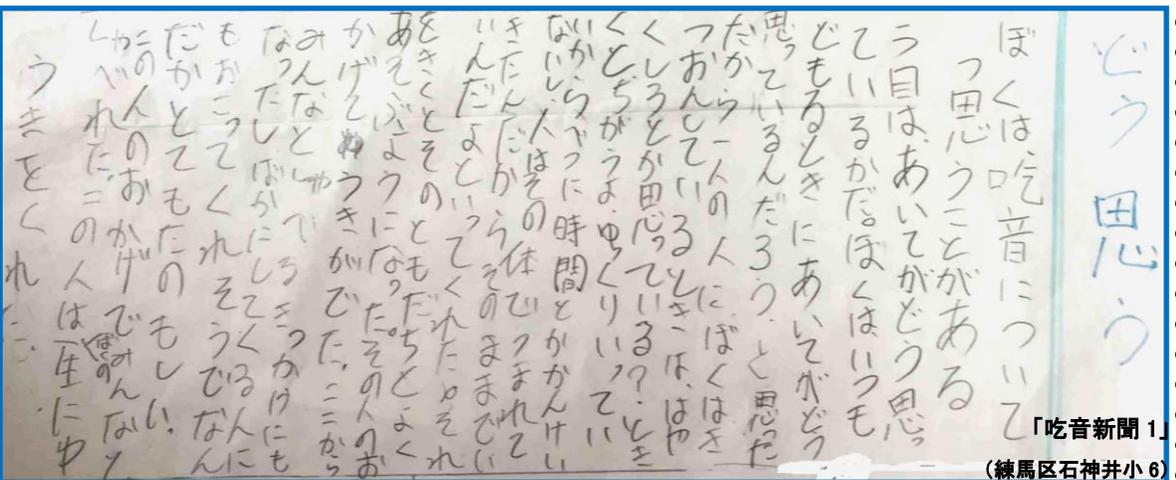
時にとても大切な気持ちをKさんは持っている。そう感じました。

また、初めての取り組みである「**吃音新聞**」は、小学生それぞれの吃音への思いが込められたものでした。吃音に対する考えは人それぞれというのを子供達の質問から感じました。それは、吃音は良いか悪いか、吃音は好きか嫌いか、吃音がある方がいいか無い方がいいかというものです。似ているようで全く意味合いが違う3つの質問です。どの質問も私は答えに悩みましたが、子供達はすぐ答えを出していました。子供達それぞれが心の中で考えていて、他の人がどう思っているのか知りたかった質問だったのかなと思います。

「**吃音新聞**」の発表について話している時、H.Mさん(小3)が、本番上手く発表できたこと、発表はとて緊張したこと、みんな本番でもって安心したことを笑顔で話してくれました。発表の練習の時は、少し自信なさそうな表情でしたが、本番は発表しようと思ったことを最後までしっかり伝えている、伝えたいという気持ちが伝わる発表でした。

**追伸**

Kさんは、いじめられた経験も、とても恥ずかしかったけど、自分のことをちゃんと伝えようと頑張った今年の夏休み前の経験も、すべて、吃音であったから経験できたことと思いながら育っていくと思います。自分のことも深く考えられ、相手のことも相手の立場で考えられる、それはKさんの強みであると思います。その考える力をこれからも色々な経験の中で育てていって欲しいです。



「吃音新聞」1  
 (練馬区石神井小6)

『もし小学生の頃からつどいに参加していたら』

忍田 喬也(小学生グループスタッフ)

「こんなに楽しい場所はない」私は社会人になってから、この春から参加させて頂いているので、もし小学生の時から参加していたら、このように考えていたと思います。

食べるのが変である、可笑しい、異常。そのような扱いを受けている中で、つどいに参加し優しいお兄さんお姉さんに構ってもらって、話を聞いてもらって。楽しんでいる自分を容易に想像できます。

私は子供の頃、吃音のことを話すのは恥ずかしく、遠ざけていました。実際、小3の時にことばの教室(江東区南陽小)に通っていましたが、遊び盛りだったこともあり、殆どボールやトランポリンで遊んでいました。そんな私でもつどいなら、吃音の話し合いに積極的に参加していたと思います。

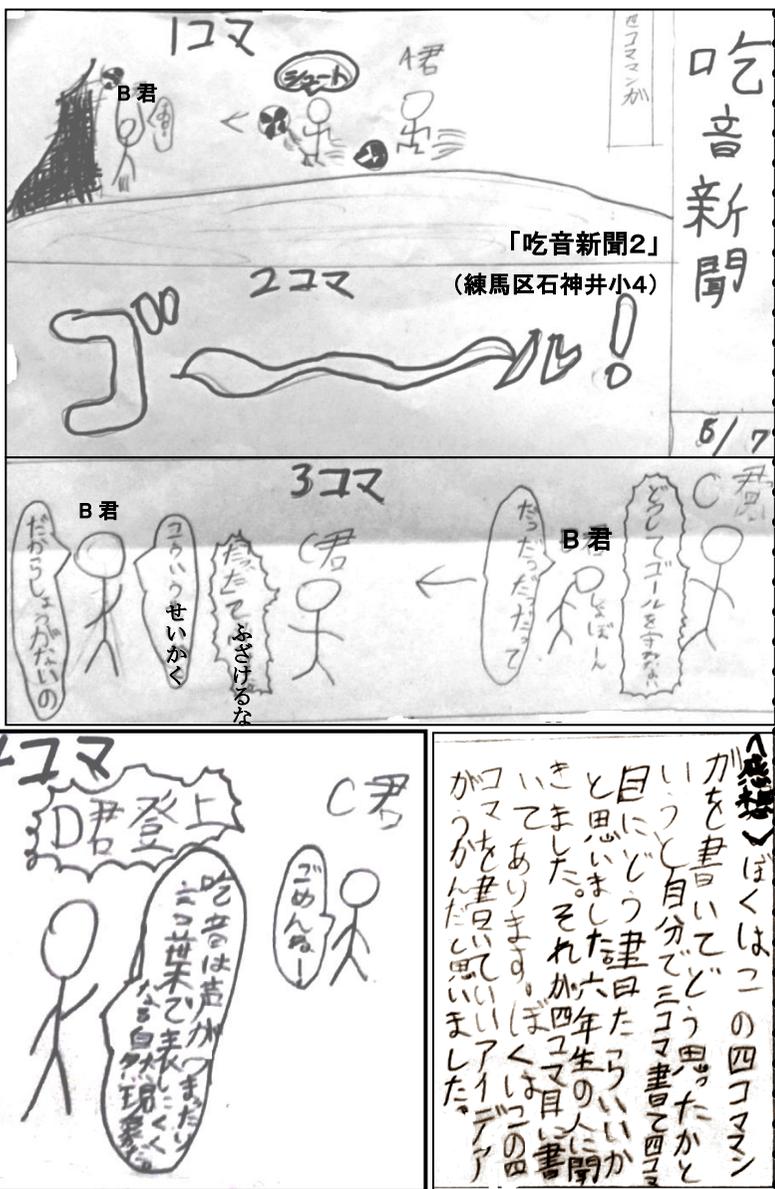
人は人生の岐路に立つ時、将来のことについて悩むと思います。特に子ども人は就労の不安があるかもしれません。僕の場合はそうでした。そんな時に、吃音の先輩の話聞くことはとても有意義なことだと思います。知識、見聞を広げられ、未来の選択肢が増えると思います。

自分は吃音がとても不安だったので、手に職を付ける為に高専に進学しました。在学中は発表等で上手く話せない時もありましたが、勉学には勤しみ資格取得にも力を入れました。その甲斐あってか、就職活動の面

接では吃りながらも自己アピールはでき、何とか希望する福利厚生がしっかりしている会社に入ることができました。

ですがもし、幼い頃からつどいに参加して、吃音に対して苦手意識を克服していたなら、また別の自分でも想像ができない未来になっていたかも知れません。

PS.今回、小学生達も時折おふざけする場面もありましたが、終始机に向かって新聞の作成に取り掛かってくれました。その姿に少し感動もしました。もし昔の自分に、「吃音新聞」を書こうと言われても、折角遊びに(遊びではありませんが)来ているのに



感想)ぼくはこの四コママンガを書いたことが、自分でも驚いたことだ。思っていたより、六年生の時に書いた。それか四年生に書いた。か、ママを思い出して、アイディアが

新聞なんて作ってられないと言ひ、ふざけていたと思います。皆の前で出来上がった新聞を發表することを伝えても、特段抵抗が無かったのひ、このつどひの場では人前に出ることに、ある種の信頼？安心？をしてくれているのかなと思います。

### **R.M さん(石神井小4 男子のお母さん)**

主人に息子が書いた新聞を見せたところ、大笑いしながら、「良く書けてるなー！どもりをセリフに入れるとは。さすが！！」ととても喜んでいました{親バカですね}。

私も今まで吃音について真面目に考えた事はなく、佐藤さんや当事者の皆さんのお話を聞いて息子のためにも、もう少し吃音について勉強したいなと思いました。息子も成長するにつれてその都度問題も出てくると思います。その問題にあたって、立ち止まり、考え、乗り越えられる心を培ってあげることが私の課題ですね。まずは自分から。。。

### **高校生グループ 作文教室紹介**

### **A.K 君(高3)**

#### **「心の支えとなる2人に出会って」**

僕は、高2の後期になって吃音の調子が悪くなった。それで、精神的にしんどくなり、学校内の教員に中途半端ではない完全に吃音のことを理解してくれる人が欲しいと思った。今までも担任と教科担任には言ってきたが、あまり深く考えてもらえずに悩んでいたことがあった。そうして僕は職員室の先生を片っ端から総当たりして吃音を元から知っている人を探した。正直、職員室の先生を総当たりするのはかなり勇気が必要だったが、少しでも楽になれるならと思いやることを決心した。

結果的に三十人くらい聞き回り、一人の女性の先生に出会った。その先生は教員免許を取る時にこんな生徒もいるというので吃音を知ったと言っていた。その先生には自分の思っていること全てを打ち明けて、本当に信頼でき、職員室を総当たりして良かったと思っている。その先生もより吃音を知ろうといういろいろ調べてくれたりもして、自分に対して親身に考えてくれている。その先生には常々感謝している。というか感謝し切れないほど自分にと

って救世主となってくれた。さらに僕は英語が好きでその先生も英語教師であった。そんなこともあり、僕は英語が大好きになっていた。そしてそれが今の夢である英語教師になりたいということにも繋がった。元々、進路のことを考えている時、将来やりたいことが無かった自分にとってはありがたいことであった。そんな先生とはもう8カ月の付き合いとなり、親や担任よりもいろいろ相談しているレベルになってきた。

そして二人目は**部活(卓球部)の友達**で信頼できると思う人がいたので思い切って打ち明けてみた。そうしたら彼は、たまたま彼のクラスに吃音の子がいて吃音を知っていると言った。なので、吃音の理解はそこそこしていたので助かった。彼にも自分の思っていることを全て言った。そしたら彼もすごく親身になってくれてとても励ましてくれて僕の味方となってくれた。彼は頭も良く勉強のこともいろいろ相談しててお互いに親友でもありよきライバルになった。彼も前に言った先生同様、言い表せないほど感謝している。

この二人に出会った今、自分にとって学校に行く楽しみはそんな二人と話すことになった。そんな二人が僕に言ってくれた言葉がとても印象的な言葉がある。それは、お前が、吃音のおかげで周りからしたら吃音の知識が増えるんだし、逆に吃音であったことに感謝しているよと言われたことでした。

最後に、このような二人に出会って考えたことがある。それは、数的には少ないかもしれないけど親身になってくれる人は必ずいるから、勇気を出して打ち明けるべきだと思った。この二人に出会って考え方も変わったし、これから、前向きに生きて行こうと思う。

### **K.M 君(高2,浦安市美浜北小ことばの教室卒)**

#### **「カミングアウトについて考えたこと」**

小学4年生の時、母に吃音を告げられた。その当時は分からなかった。吃音はどういうものなのか、母になんとなくは教えて貰っていたが、いまいち分からなかった。小学5年生の時、吃音という言葉の意味がようやく分かった。国語の音読の時、声を出すことが出来なかったのだ。とても悔しかった。今までなら普通に話せたのになんで声が出なかった

のだろう。それを思うと悔しくなった。中学の頃、出欠確認で返事が出来なかった。みんな何でだろうと思いつちを見てくる。みんな僕が吃音ということを知らないからだろう。その後も引き続き、国語の音読など英語の発表。自分の番が来るまでは落ち着いている。本番になったとたん急に声が出なかった。とても大変な思いをした。中学3年の時は高校入試の面接で集団面接の時に声が出なくて大変だった。

高校の入学初日、思い切って吃音のことをカミングアウトしようと思った。中学の頃に、小さい頃からの友人がいて、中々カミングアウトすることができなかった。高校はまだ、誰がどんな人なのか知らないからだ。でも怖かった。吃音を理解してくれるのか、分かってくれるのだろうか、自分も普通の人と同じように接してくれるのだろうか、それが不安で仕方がなかった。他己紹介の時、自分は吃音だと言った。とても、怖かった。しかしみんな僕が吃音だと言った時は静まり返っていたが、その後はみんな普通に接してくれた。ちゃんと僕が吃音だということを理解してくれるんだなあと思い、とても嬉しかった。それと同時に後悔もした。なぜ、中学の時に言わなかったのか、もしも言っていればこんな大変な思いをする必要はなかったかもしれないのに、自分の言いたいことを言わずに我慢する必要はなかったのに、と。多分、高校のみんなと同じように理解してくれたのだろう。

吃音のことをカミングアウトしたことで、たくさんの方に勇気を出してできるようになった。高校2年の時、広報委員会になった。中学生の人に自分達の高校の魅力を伝える委員会だ。広報委員でたくさん話してる内に、話すのが楽しいと思った。みんなに、自分の意見を伝えるのは素晴らしいものだと思った。吃音だろうがなんだろうが、自分の思いはしっかり伝えるべきだと思った。

### 【感想】小松 優花 (スタッフ)

私はずっとカミングアウトしてきてないので、カミングアウトする勇気があって素晴らしい。吃音と伝える時は物凄く不安だし、緊張するし、心配だし、マイナスの事しかないのにカミングアウトする！という決断をしてすごいと感じた。

カミングアウトする事で M さんは勇気を出して

様々ことに挑戦する事が出来た様なので、カミングアウトして正解。自分の言いたいことは我慢せずに言うという考えもその通りだと思う。

M さんは、小中と大変な思いをしてきたんだなと感じた。その分、高校では楽しんで学校生活を送れている感じがしたので、このまま高校生活を楽しんで欲しいと思いました。

### M. W さん (高3, 目黒区東根小ことばの教室卒)

充実した二日間を過ごすことが出来ました。話し合いでは『自分史』をやりました。何年前かにやったけど時間があまりなく駆け足でやった記憶があったので、ゆっくり時間をかけてやれることができて嬉しかったです。そこで気づいたことがありました。

小学校の自分。中学校の自分。高校の自分。大きな違いがありました。

小学校の自分は悪口を言われたり、吃音に対して無理解な先生などに自分の意見(言いたいこと)を言えず自分を出すという機会がありませんでした。

中学校では(ことばの教室の先生などと相談して)自分からクラスみんなに吃音をカミングアウトしたり、夏休みの宿題の人権作文で自分の吃音のことを書いたり、中学2年生で学校で応募してもらい代表として広島平和記念式典に参列し、そこであったことを全校の前で発表したりなど自分を出すという機会が沢山ありました。

高校でも、自分からクラスみんなに吃音をカミングアウトしたり、部活紹介でマネージャー(副キャプテン)として全校の前で名前を言ったり、学校のオープンキャンパスで自分のコースについて話をしたりなど、自分を出すという機会が沢山ありました。

これはことばの教室や小中高校生の吃音のつどいに出会えて、そこで様々な人に出会い自分自身が変わった。そんな気がします。

作文は『私の決意』という題名で書きました。将来どんな自分になりたいのかを強い意志と共に書きました。中学2年生からの夢、必ず叶えます。

### 「私の決意」

私には、「吃音」がある。これを持っていることにより、様々なメリットがあった。自分をしっかりと見直す

ことができた。つどいに出会えて沢山の人に出会うことができた。反対にデメリットも多くあった。学校の吃音に対して無理解な先生。しゃべることへの過度への緊張。

しかし、これらの経験は「吃音」を持っていない人には分からないことだと思う。だからこそ私には夢がある。「ことば」の面で悩んでいる方の味方に、私は誰よりもなれると思う。その人の症状を見るのではなく、その症状とその人を見れる言語聴覚士になりたい。

高校2年生で介護職員初任者研修の資格を取るための特別養護老人ホームでの実習の時に、「失語症」を後遺症として持っている方に出会った。「将来の夢は？」とそこご家族に聞かれ、「言語聴覚士になりたい」と私は答えた。それをご家族の方が、利用者さんに伝えてくれた。そうすると、「頑張ってるね。俺は嬉しいよ」と手を握りながら言って下さった。

高校2年生でも、特別養護老人ホームでの四日間の実習があった。そこで二人の利用者さんとの出会いが新たな夢を見つけさせてくれた。

一人目の方は、上手く言葉が出ない方だった。最初は何かを言いたいのだろうなということしか分からず、職員さんと呼ぶということしか出来ずにいた。しかし最終日は、一回だけだけ言いたいことが分かって嬉しかった。そして、その方が大きな声で、「Wさん！！」と呼んで下さり、涙が出るかと思うほど嬉しかった。ここで「ことば」の大切さが少し分かった気がして、どの様な方法でも「ことば」を伝えさせてあげられる言語聴覚士になりたいと思った。

二人目の方は、左耳がわずかにしか聞こえない利用者さんに出会った。話すことは出来なかったが職員さんは耳元で大きな声で話していた。私もそんな風に出るようになってほしいと思った。このことから「きこえ」に悩んでいる方にも「ことば」をしっかりと伝えていける言語聴覚士になりたいと思った。

私は大学を受験し、夢を叶える。勉強ももちろん大変だと思うけど、実習も大変だと思う。しかし私は二回もの実習を乗り越

えてきた。だからこそ私には何事も乗り越えられると思う。というか、必ず乗り越え、必ず夢を叶える。誰に何と言われても、夢は変えない。

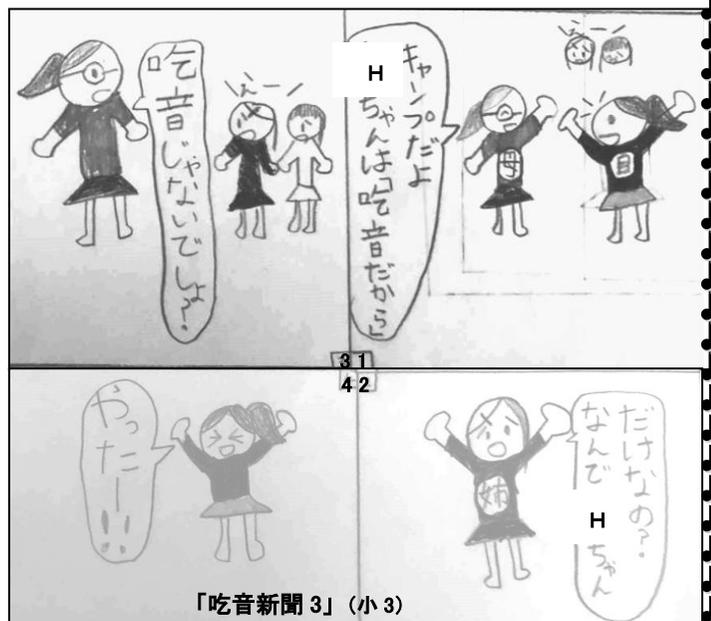
### 山岸 大起(高校生グループスタッフ)

#### 「沈黙のハドル Huddle !」

「ハドル！」初夏のグラウンドに、大きな声が響き渡る。声の下にみんなが集まり輪ができた。そして暫く沈黙が訪れる。冷やかな視線と、苦笑いを感じながら「み、み、右スプレット ポストパターン コール1」と言った。

大学三年生だった僕は、アメリカンフットボール部に所属し、クォーターバックをしていた。このポジションは、作戦名を皆に伝えることが必須だった。しかも、40秒以内にプレーを始めないと反則なので、速やかに作戦名を伝えなくてははいけなかった。元々、このポジションではなかったのだが、チームメイトが負傷し、代理で務めることとなった。野球ならば4番兼ピッチャーくらい重要なポジションであり、勝敗はクォーターバックの出来で決まるため、責任は重大で押しつぶされそうになっていた。

そして何より、作戦名を伝えることが不安で、不安で、毎日の部活が辛くなっていた。また、その年で引退する四年生が、イライラしているのが伝わり、「最後の年に迷惑をかけてはいけない」そんな思いで、逃げ出したくなっていた。当時は吃音のこと



「吃音新聞3」(小3)

を他人に言うのが恥ずかしいと思っており、誰にも相談が出来ずにいた。結局、作戦名を伝えるのは別の部員がすることになり、ホッとしてとても救われたのを憶えている。でも、どこか心の奥底で引っかかる物を抱えていた。

大学を卒業して就職し、半年が過ぎた頃、吃音のセルフグループに初めて参加した。そこでは、皆どもっていて、自分の心の奥にため込んでいた物を吐き出すことができた。何度か参加し、時には泣きながら話したこともあった。そんな経験をしてく中で、自然と周囲の人達に吃音のことをカミングアウトすることもできた。

以前は、死んでも言えない様なことかと思っていたが、言ってみると案外友達に聞いてくれて、理解を示す人もいた。そして、ふと大学でのことを思い出した。あの時に吃音のことが言えていたらと思う。もしかすると部員は、言ってくれるのを待っていたのかもしれないし、理解はしてくれる人達だったと思う。自分の弱い部分をさらけ出すと、全てが崩れ落ちそうだと思っていたが、そうではないのだと思った。弱い部分から目を背けているからこそ、弱い自分を認めたくなくて、誰にも言うことが出来なかった気がする。あのグラウンドの輪の中に入れなかった日を今でも悔やんでいる。

### 後記

♥吃音持っていても、友とつながる…という事は、フツーにできます。どもりを治したい…という考えは実は **Facial Wants 表面上の欲求** にしかすぎない。どもる我々が **Real Wants 真に欲しいもの** は、友とつながりたい…という一点。それには、必ずしも、直すなどという、面倒くさい事は不要なのです。周りに合わせようと、考え過ぎないこと。

♣「僕には小さい頃から吃音があり、小4で悪化した。心配した母が病院を見つけて来てくれたので行ってみた。小5になる直前の春休みのことだ。僕は重い難発だったが、たった一度の訓練で大きく改善した。夢のようだった。少し連発しながらも、授業で発表ができることが嬉しかった。その状態は半年続いた。冬が来る頃、だんだん話し辛くなって来たと思ったら、瞬く間に発表が出来なくなった。地獄に突き落とされた。また話せるようになって、懸命に練習した。その後、つどいに参加するようになって、吃音を治す治療を受けても、大半は元に戻ってしまったり、以前より悪くなってしまう人がいることを

知った。僕は定期的につどいに参加しながら、つどいの先輩や友達との交流を通して、少しずつ前に進んでいる。もう、吃音を治そうとは思わない」

上記手記が True Evidence と言えます。一時的改善はあっても、砂上の楼閣ごときものでしかない。私自身も、高校生の頃、何度も経験しています。隠すことが上手になるだけで、治ってなぞいません。

夜の勉強会で観た、DVD 'The Way We Talk' by Michael Turner でも、ゆーくーり は一な一すような方法が、どんな場面でも使える訳ではないと、自身吃音のスピーチセラピストが正直に語ってくれています。アメリカでも同じことです。

◆つどいスタッフの役割は、**Catalyst.Facilitator,触媒** ではない。参加の皆さん方が場の力を借りて、皆さん方自身の力で生きていく力を見つけて出していける。そんな場作りを、スタッフはしているに過ぎない。皆さん方のそばにやさせていただいて。触媒とは高校化学で学びますが、自らは変わらない(化学変化はしない)が、周りが変わるのを手助けするものです。

スタッフはフツーにどもりつつ、どんな場にすればいいか? いろいろ悩みつつ、時には体張って、つどいを進めます。いくらどもろうが、どもらなからうが、考えて進めなければ、進まないで、ひたすらに。そんなどもりながら、やるべきことを、突破していく…姿、話しぶり、どもりっぷり…を見ていただきたい。

なならないものだという覚悟をお持ちになられ、その上で如何に自分らしく素敵な人生を送っていけばいいのか考えていただく場であり、そのお手伝いをしています。

♠吃音でない兄弟姉妹の方も、楽しく吃音にまつわる問題について学べる場になりたいと思っています。次回、日帰りのつどいには、ご家族でお越しください。お父さんもどうぞ! (代表 佐藤 隆治)

2017サマーキャンプ	収入	支出	残高
参加費(計42人、内2人初日のみ)	¥457,000		
宿泊代(当日支払い分)		¥202,600	
宿泊代(前支払い分)		¥75,900	
貸し切りバス代(往復)		¥60,000	
安全保険代(43人分)		¥8,910	
からだの揺らし講師謝礼代		¥10,000	
案内状印刷代		¥24,000	
案内状発送費(203部)		¥17,480	
下見代(スタッフ3人往復交通費等)		¥17,000	
花火代(着火マン等含む)		¥4,934	
写真代(6月つどい分)		¥870	
合計	¥457,000	¥421,694	
収支			¥35,306

残金は次回つどい(演劇で遊ぼう!)に回させていただきます。会計 本田拓也